

<資料紹介>

長田穂波日記1936年⁽²⁾¹⁾ ——療養所のなかの生の痕跡——

長田穂波日記1936年⁽¹⁾ 本誌第370号（2008年1月）掲載

阿 部 安 成

大島青松園で活動する霊交会は、『霊交』という月刊会報を発行していた。活版印刷でほぼ毎号8頁立て、すべての号にではないが1部5銭の定価がつけられていた。いまのところ残る最古の『霊交』は、第106号（1927年8月1日。霊交会）である²⁾。現存する『霊交』すべての号の編輯兼発行人が長田穂波となっている（長田嘉吉（穂波）となっているときもある）。第106号では、巻頭言にあたる「セ、ラギ」に「ほなみ」と、また「編輯後記」に「ホナミ」と署名されているように、この『霊交』は編集も記事執筆の多くも、穂波によっておこなわれていた。「セ、ラギ」も「編輯後記」も号によっては署名がないときがあるが、それらの執筆者も穂波とみてよいだろう。霊交会図書室に残る『霊交』は、包帯で括られていた。それは、わたしには、



写真1 『霊交』を括った包帯

1) 本稿は2002-2004年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)「ハンセン病者についての歴史社会学研究」と、2008年度財団法人福武学術文化振興財団瀬戸内海文化・研究活動支援調査・研究助成「国立療養所大島青松園（香川県高松市）における知の集積と表明についての文化研究」の成果の一部である。

2) 『霊交』はわたしが調査したかぎりでは、国立療養所大島青松園内の霊交会教会堂図書室（執務室）と国立療養所長島愛生園内の神谷書庫にある。『霊交』からの引用は出典を、R106, 27.08.01, のように、また所蔵場所は霊交会を霊、神谷書庫を神と略記する。

療養所らしいようすにみえた。包帯しかなかったのかもしれないし、包帯だけは豊富にあったともいえよう。あるいは、入園者が作業としておこなう包帯巻きは、いつ終るともない飽くような倦むような使役でもあったろう。そうした、在園者にみづかな包帯で『靈交』が括られていた。

穂波自身が、『靈交』誌上に、「この際、一寸、靈交会事務に付きまして申上げて置き度いと存じます」と書き始めて、『靈交』をめぐる役割を明示したことがあった。

中には靈交会と穂波とを同一に御取扱ひにならるゝ方もありますが、斯る混同はハツキリ区別して頂き度いと存じます。靈交会と穂波個人とは別でありますから。会の事務は分タンして居りまして、穂波は本誌の編輯方面と聖書研究など受持つてゐますが^(マ マ)＝會計は三宅老兄と石本兄とが当られ、其の他の事務も多くはこの両兄が御苦勞奉仕下さつて居ります。図書係は林兄、献金係は高本兄と云ふやうに記録係、何々係と云ふやうに別れて居りますので、御参考までに申上げて置きます。穂波の靈交会とか、穂波を以て靈交会の牧師のやうに御間違ひ下さらぬやう御願ひ申上げます。元より各方面を助太刀は致して居りますが＝。靈交誌も個人のものでなく、会の事業の一つでございます。(「附記」R 238, 38.09.10。靈)

と穂波と靈交会との峻別を、彼自身が主張していた。だが、誌面をみれば穂波の活躍は顕著だったのだから、『靈交』を穂波の個人誌のようにみるむきもあったのだろう。

ここで靈交会についてかんたんに説明しておこう。1929年に創立15周年を迎えた靈交会は、1914年に「僅に四、五名の兄弟によりて、組織した」ことに始まる(三宅清泉「靈交会創立記念日を迎へて」R133, 29.11.5。神。設立の月日は11月11日)。創立から15年が経ったこのときの会のようすが、穂波によって記されている(ホナミ「会報」同前)。

私共一団はキリストを中心とした生命の渦であります。／私共の会則は聖書そのものであります。国民として国法に反する罪を犯して悔改めざる人は除名する事になつて居ります。／私共は日本基督派に教籍を置いて居りますが、派そのものに対する信仰は甚だ薄いので、時には皆無なのでありまして、只キリスト、イエスと之を世に贈り給ひし父神に対してのみ忠実ならん事に志て居る会であります。／私共の会は日曜と水曜とに聖集会を開いて礼拝致します。尚、夕方に祈会を、正午に聖書研究会を毎日催します。礼拝の司会者

は受洗者の順番に当ります。説教はありません。体験の信仰説や感想談を示された人、受けた人が証言いたします。／私共は国際日には礼拝を開き国幸の為、皇室の御幸福を祈り、文武百官に主の聖旨を仰ぎ政道の明るからん事を願ひます。／私共の兄姉は皆々忠実であります、しかし記念会に当りまして三宅官之治大兄には特に感謝の辞を呈したいと存じます。／私共の会の協議員は三宅兄、旭兄、山本（徳）兄、石本兄、林（友）兄、高本兄、内野兄、鉄林兄、三好兄、大川兄、松山兄、七味兄、神田兄、岸野兄、穂波、以上十五名であります、一ケ年にて改選致します、再選は有効であります。／私共の会は高松の宮内牧師とエリクソン宣教師、各教役者に感謝の辞を呈します。亦、母教会高松市塩上町東教会の全員に深くお礼申し上げます。／私共の会は当大島事務所の各位に感謝を捧げます。／私共の会は来たるを拒まず去るを迫ひません。しかし会を去る人は転院なる人か、然らずば不信仰の人等でありました。／私共は伝道的な態度は島内で致して居りません。／自発的に来る事を待つものであります。然して現員六十余名。／追加……会への要件と個人への要件とは、文通に可成の区別をして戴きたいと存じます。／大島には現在患者の総数は、四百名近くに成つて居ります

この時点での『靈交』は、発行部数300部となっていた（「編輯後記」同前）。この部数も「幸各方面に愛読して頂きまして、三百部が残り僅で御座います」といえるほどに配布されていた（「会計決算報告」同前）。

靈交会会報の『靈交』は、創立17周年を記念して、誌名から「会報の二字を消して、『^{マ マ}靈交として改めて第壹号より出発する事」となった。このとき『靈交』の発行部数は400部となっていた（長田穂波「おねがひ」R 1-1, 31. 11. 10. 神）³⁾。その翌1932年夏のころには、

現在会員は六拾余名、内求道者五名、常に病床にある者拾名内外であります。集会は日、水、金の一週三回正午十二時より二時まで二時間、御話は日曜は長田兄、他に一、二名、水曜は天沼兄、他に一、二名、出席者四拾名内外、金曜は十二時より一時間、あかし会有志数名、聖書研究月、火、十二時より一時間旧約、天沼兄、木、土、十二時より一時間新約、長田兄、早天祈禱会毎日午前四時半より一時間、出席者四、五名、毎夕の祈会午後六時より一時間、出席者二十四、五名内外、司会は日、水、は会員順番、夕の祈会は一週間ごとに順番、第二の日曜の夕は二時間位座談会を開き、意志の^マ疏通を^マ謀る。靈交誌は毎月四百六十部発行致します。私共の使命は信仰によりて、祈に生きる事であると信じ、弱い

3) 『靈交』はこの1931年11月10日発行号から第1巻第1号の巻号表記となり（以下、1-1、と略記する）、1932年12月10日発行の第1巻第14号までこの表記がつづき、1933年1月10日発行号から第170号ともにもどる。ただしこのとき通号の番号がずれている。

信仰を互ひに励し合つて居ります。(三宅清泉「報告」R1-10, 32.08.10。神)

とのようすとなっていた。この年には、「祈りの時を報ずる鐘が与へられ、島全体にアンゼラスがひゞくようにもなった(「編輯後記」R1-12, 32.10.10。神)。

ここで、穂波による霊交会の「紹介」をみておこう(ほなみ「霊交会内容」R175, 33.06.10。神)。

(一) 会員心得／一、会員はキリスト信者及び求道者たること。／一、会長は主キリストを戴くこと。／一、委員十二名を受洗者の内より全会員にて撰出すること。／一、委員の任期は一ケ年とし、毎年春の復活祭に改撰すること。／一、委員は任期中諸種の会務に当り、之を善処し本会の発展に心を注ぐこと。／一、聖書を一切の会則となすこと。／一、集会を尊び、つとめて出席なすこと。／一、各々自発的に会務に励むこと。／一、毎月定期又は其他任意、献金をなすこと。／一、春秋二回、昇天者記念会をひらくこと。／一、永久退所者に金一封を贈ること。／一、国禁を犯し又は六ヶ月以上、何ら理由なくして集会に出席せざる如き者は、委員の協議により適当なる処置をとること。／注意、入会志望者あるときは、本会の会員心得を能く話をなして承諾を得て初めて会員名簿に登録すること。(以上)

そこでは、このような会の規律が示されたり(入会にさいしては「前身が如何なる方にても決して問ふ処はありません」との寛容さも示す)、「(二) 会員の種類」や「(三) 会の事業方面」が報されたりした。

1933年には、「恩寵こゝに二十年」(長田穂波)が掲載された『霊交』(180, 33.11.10。神)で、「霊交会歌」が披露された。

【一】玉藻の浦にほど近き^(マ)八島の裾の大島は／松の調べもいと妙へに／自づからなるゆにはぞや／【二】梢も霞むはるの朝／伏て祈らん、もろ共に／月かげ清き秋の夕／たゝえ歌はん諸共に／【三】暗く冷たき現し世を／さ渡る人は誰もみな／真の愛のあたゝみを／求ゆぬ者はなきそかし／【四】救ひの御手に抱かれし／我らは心ひとすじに／幸さはなれと大方の／人のためにぞ祈るなり／【五】清き心の祈りこそ／我が行く道の生命なれ／霊と霊との交りは／我が会の生命なり

「記念号」ゆえに会歌も載せられたのだろう。この号の「編輯後記」で穂波は、みづからの郷愁の想いも表白している――「田舎で生れた自分は、稲の穂波の房々と黄色く揺らひて居る豊作の有様が目に浮んで、村雀の肥つた姿までが思

はれて来る、島よりも町よりも農村がなつかしい」と、筆名の由来を示すかのような短文を記している。

礼拝堂の新築は、1935年のことだった。

今度、米国の MTL より大島キリスト教の礼拝堂を新築して下さる事に決定致しました。四間に七間の建物に図書室が附属いたしまして、鉄筋コンクリートであります。設計は近江のセールス会社の有名なヴォーリス先生に依頼されとの御話であります。現在のバラック建は三年以前の建築で、二間に六間、それに押入が一個所と図書押入が二間とであります。私共のレプラ献金を以て造りましたものでありまして未だ丈夫であります、これはトリノゾきて其跡へ立派なものが出来ますと、大島の風景をも一つ加える事になります、私共は大変に喜び且つ神に感謝いたして居る次第であります。(ほなみ「大島たより」R185, 34.04.10. 神)。

新築となる礼拝堂の設計者は、W.M.ヴォーリスだった。前回記したとおり、穂波は1936年の日々の記録を、近江セールズが発行した「メンソレータム本舗編輯日記」に書いていた。この礼拝堂設計を機に、翌年の日記帖が贈られたか購入されたかしたのだろう。その後できあがった設計図では、礼拝堂は「本館は四間に六間でありまして附属図書室は四間に四間」となった(ホナミ生「大島たより」R186, 34.05.10. 神)。この礼拝堂図案を伝える『靈交』では、その発行部数が600部となったと報告されていた(「編輯後記」同前)。それもちまちに、1000部にまで拡大する(「編輯後記」R190, 34.9.10. 神)。そして礼拝堂が竣工し、1935年5月25日に献堂式がおこなわれた(「献祝辞」R199, 35.06.10. 神)。

さて、前述のとおり『靈交』の「編輯後記」はそのすべてに署名があるわけではないが、これは同誌編集を担当していた穂波が執筆したとみてよい。穂波にとって、「この欄は『わたしの頁』として楽しい赤裸の場所だ、頭もヘソも尻もマルダシである」(「編輯後記」R206, 36.01.10. 神)と書くほどに、愛着と照れがあったのだろう。残っている日記が書かれた1936年に発行された『靈交』の「編輯後記」(R216, 36.11.10. 神)には、つぎのような記述もみえる。

穂波は今年の暑さにイサ、カ参りました。疲労を覚えますが靈気は益々盛んで押へ兼ねる位です。御安心下さい、更に御加禱を願ひ上げます。内村鑑三先生、藤井武先生の著書

は何度読んでも味は尽きません。土山鉄二先生^{〔ママ〕}のコロサイ書詳解は有難かつた。伝記物ではパトソン・テイラー支那開拓者には心が躍るのを覚えました。何れも恵贈である、厚く感謝します。

この年の穂波は、内村鑑三の著書によりながら、ロマ書を始めとする聖書研究に熱心だった（後掲の日記4月6日の条など）。藤井武の著作については、島外のひと橘新より送られている（同じく5月19日、24日の条）。

2008年春からわたしは、霊交会教会堂図書室の蔵書整理を始め、そこに残る穂波の痕跡を確認している。内村の著書は、『内村鑑三全集』全20巻（岩波書店、1932-1933年）や、『旧約十年』（聖書研究所、1926年、第4版）などがあり、藤井のそれは、『藤井武全集』全12巻（藤井武全集刊行会、1938-1940年、再刊）があり⁴⁾、また、土山鉄次『幽囚書翰コロサイ書詳解』（一粒社、1935

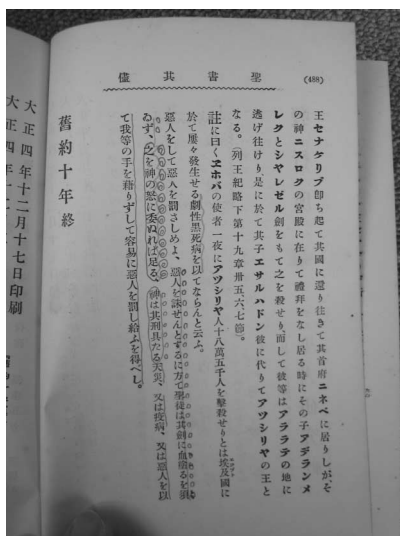


写真2 『旧約十年』の書き込み

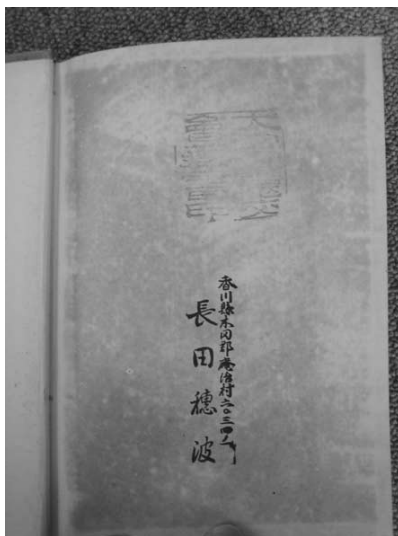


写真3 『旧約十年』の穂波印

4) 霊交会図書室には、第二次世界大戦後に刊行された『内村鑑三信仰著作全集』全24巻（教文館、1961-1964年）と『内村鑑三聖書註解全集』全17巻（教文館、1960-1962年。いまのところ第2巻と第11巻欠）もある。『藤井武全集』は編者と発行者が矢内原忠雄で、図書室には『矢内原忠雄全集』全29巻（岩波書店、1963-1965年）もある。

年、3刷)が、いまでも霊交会の図書室にある。

『内村鑑三全集』には、そのすべてに「大島霊交会蔵書印」の印が押されており、またいくつか赤鉛筆での傍線がみえるが、これはどうも穂波による書き込みではなさそうである。内村の『旧約十年』には、さきの霊交会の蔵書印にくわえて、穂波の印も押されている。そしてこの書に書き込まれた傍点や傍線は、穂波によるとわたしはみている。『藤井武全集』にも霊交会蔵書印があるが、穂波による書き込みはいまのところない。

おそらく穂波が『霊交』の「編輯後記」に、「有難かつた」と記したコロサイ書註解は、前出の1935年発行の『幽囚書翰コロサイ書詳解』である。ここにも、穂波の特徴のある赤傍点や赤傍線が記されている。しかも、この本の表紙見返しには穂波への献辞が、本文最終頁には穂波の署名と書き込みが、裏表紙見返しには穂波の印がある。表紙見返しの献辞は、

日本自由メソヂスト神学校長我阿部野教会牧師神学博士土山鉄次先生の本書を、敬愛する
長田穂波兄に贈呈するを光栄として喜ぶ／昭和十一年八月三日／大坂 北村寿四郎／謹識
である。次回掲載分の穂波日記をあらかじめ記すと、8月6日の条に「コロサイ書詳解を頂く(北村老より)」と記され、そののちの日記にいくどか、コロサイ書を読む、研究するといった記述がみえる。この贈呈に対して穂波は、

本書を賜りしは神の大なる憐みと恵みである。神は
予をして更に戦ひに前進を計り給ひつゝあらるゝ事
を信ずる。本書を賜ふ、これ使命ある兆なり。父よ、
希バ聖旨のまゝに用ひ給へアメン／昭和十一年八月
末日／穂波

と応じている(同書最終頁)。

これらの書物を読んで聖書研究をする穂波にとって、少なくとももう1冊、欠くことのできない書籍があった。それは、前回掲載分の日記に「長い間の憧憬と代価の準備に心を砕いて居つた聖書大辞典を注文して喜しい」(3月21日

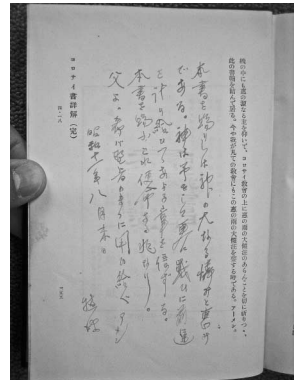


写真4 『幽囚書翰コロサイ書詳解』の書き込み

条のつぎの週末余白)と記された辞典である。日記に、購入決心(3月19日条)、注文(3月20日条)、到着(3月27日条)、読書(3月28日条)とくりかえし書くほどに穂波には、大切な、必要な、そして楽しみだった辞典である。これがおそらく、図書室にある、『聖書大辞典』(日曜世界社、1935年、再版、15円)だろう。ここにも独特の赤傍点や赤傍線がたくさん書き込まれている。日記にあった15円69銭とは、送料込みの価格だろう。

この北村は図書寄贈のまえにも、『靈交』誌上にその名があがっていた人物である。北村はしばしば、靈交会に献金をしていた⁵⁾。また『靈交』には、北村の著作である『世界の平和を謀る井伊大老とハリス』(近江人協会)の広告も載っていた(R190, 34.09.10。神。R193, 34.12.10。神)。

穂波たち靈交会のひとつとは、本の贈りものなどによって、島外のひとつとつながっていた。それはただの物のやりとりではなく、信仰と研鑽と親交のあらわれでもあった。それは、穂波自身が記したとおり「不自由な手にペンを紐で結びつけ」(「はしがき」『光れ輝け』)て傍点や傍線、そして彼の想いや考えが書き込まれた書籍のあちこちにあらわれている。「右手に紐で結びつけたペンを更に右の頬に押しつけて書く」(「顔のコブ?」同前)という穂波の文字は、それにしては読みやすいともいえるが、わたしには、紙に書く、というよりも、紙を引っ掻いた、その跡にみえてしまう。活字にかわってしまった文字でもなく、また活版印刷にまわすための原稿の自筆文字でもなく、日記や本のあちこちに書かれた、おそらくひとにみられるとは思ってもせずに書かれた穂波の文字に、確かな彼の痕跡をわたしは感じている。

□□□

4月1日(水) 祝会に出席して・・・実に涙を催して来るのを何とも

5) 3円(「報告欄」R215, 36.10.10。神)、2円(会計係「感謝欄」R187, 34.06.10。神)。1円(「感謝欄」R1-4, 32.02.10。神)。橘新からの献金もあった(50銭, 60銭, 会計三宅生「感謝欄」R211, 36.06.10。神。60銭, 会計「感謝欄」R208, 36.03.10。神。60銭, 会計係「感謝欄」R203, 35.10.10。神。3円, 「感謝欄」R195, 35.02.10。神)。

出来なかつたのである。／それは一つには皇国の民と生れて、徒らに粟を喰む虫の如き自分を視て。／いま一つは神によれる自分の生命の強さと使命の尊さと思ひめぐらして。／○一足の風^{フウ}に花見風に騒き居り。

4月2日(木) 読書／足傷にツワの葉を貼りて試む／人生をシツクリと神に任せ込むで活きぬく信仰をば、特に与へられたい、他に念なし。／○島風や病みて眠れぬ夜明かた

4月3日(金) 読書／イスラエル民族の研究に没頭する。これは大いに聖書の信仰をば確信づけるによろしと思ふ――。／明日よりは編輯に執りかゝる考へなり。神よ聖旨をなし給へ――。／○春祭り長冠のゆらぎ居り〔神武天皇祭〕〔下線部は印刷文字〕

4月4日(土) 霊交編輯／原稿九枚／俳句十句作／読書も大いにする。／今日は大活動であつた。／○引鶴や浪路のはてはこまくだら

週末余白

4月5日(日) 集会／霊交会協議員改選とする。石本、三宅、藤田、林、日乃、天沼、山静、高本、内野、長田、桑田、森、以上当選とす。／東京の斉藤先生より書物送られた。／○引鶴や浪路のはてはこま、くだら、

4月6日(月) 原稿八枚、『道は近し』ツバサ／内村先生の講議^マによるロマ書を学ぶ……。／評議員会に出席する／八日の祝辞を下書する処あり。／○つゝじ咲く島にも春の芝居かな

4月7日(火) 今日は読書／ロマ書講議^マ甚だよろし。自分の共鳴する処甚だ多なり／祝餅を下さる、甚だ喜し、人と共に喜び得る事の幸福よ／今夜は座談会に招かれてゐる、出席／○土筆摘むひとをちこちに陽はうらゝ

4月8日(水) 今日は九時より表奨式^マを挙行された。石本、上本、北山、長田、北池、林友、白石、宮崎、笠井以上九氏なり。／引続きて自治会五週年記念祝賀式を挙行さる、議長として祝辞を述べ／閉会后、万才あり。更に石崎氏の葬義^マ、夜は活動あり／○遠く市の交響楽やタカすみ。

4月9日(木) ロマ書研究／エリクソン師御一行が御来島下さつた。／主に勇む生命、これ一つでよい！／所長殿各位殿へ御礼状を記す／○雨の松はら

み雀のぬれてをり

4月10日(金) 青年団紀念日／読書に終日す／春らしき陽のぬくみがする
かと思へは、今日あたり余寒を感じられる／下腹部張りて甚た苦しく放屁幾発
もあり／○としふりし社や松の花けむり

4月11日(土) 原稿七枚、『神の体験』、愛の泉社へ／春はナマケ気味であ
る。しかし問題は是れだ、『神に忠実たる生活か否か・・・』／働きでも修養
でもない信仰の実話だ／○春雨や三味の音もるゝ港町

週末余白 春の蚤くもなく押へられにけり／春も未た、若い花もなく、霞も
ない、小寒い昨日今日である／今週は受難週であると言ふ・・・・・・／主よ信
を増させ給へ。／○永遠の花をたずねん聖書たより

4月12日(日) SSにて司、集会にて語／手紙かき、読書する／春雨のシ
トシトと降りて、昇天者の紀念にふさはしき日和であつた。復活と神の体験と
を語りた／○井ースター教会の庭草青き

4月13日(月) 読書大いに／春の中に這入きると、花の如く咲き出らるゝ
のであらふ・・・・・・また草の如く萌え出るのであらふ／生命の春は神の恵の中
にある、這入きればよい／○ひるの雨弥生の園は蒼青し

4月14日(火) 読書／庭の葉牡丹のくき伸びて、金仙花の三、四輪つケた
るに隣りして立つ。百合の芽は十葉ばかり二寸ばかりになりて五、六株あり／
六時より評議員会／○背戸の昔かく人ありて夕煙り

4月15日(水) 原稿五枚／沢山ホゴを作つた、どうも詩材が甚だ面白くな
いのでこまる／今日は藻汐草が来た。おときさんも、母も、たゝかいも可成で
あると思ふ／○夏まつや破れ障子をたてたまゝ

4月16日(木) 原稿三枚／藻汐草が原稿に苦心して作る『空想』『親切か』
『春情譜』を綴る。／夜あたゝかし、九時半まで『予算内審会』に出席、たゞ
し三分の一終了。床汗はむ／○夜桜の中やホテルの舞踏会

4月17日(金) 読書／ラヂオが出来てきた、やゝひくいが、先ず聞こゆる
のですでに安心する／午後四時半より評議員会、『予算内審議』九時終了。／
腹よはき友ニンニクを植えて居り

4月18日(土) 読書／聖書研究は甚だ喜しき極みにして、何よりも楽しき事なり／予算案附議室長会を開催して、四時間の間に全部承認に可決確定。

／○開帳や御本尊^{ぼんずん}は行基の作とかや

週末余白 今週は原稿を余り書かなつたので、何となく淋しい思ひがした／しかし今週程に教はつた事は甚だ尠いのであつて、福音を更に有難く思へてゐる／俗事も何かと甚だ多忙であつた、感謝々々

4月19日(日) SS, 集会／『高原の花』と題して約一時間ばかり語る。／これは貧しき者の福音である。／兎に角、予はキリストを信ずる一点張である／野球リーグ戦を見る／○初夏の島南より来たりけり

4月20日(月) 何もせず、遊びもせず、ゴテゴテ雑用／野球など見たりロマ書を少しく学んだり、ニウスを聞いたりすると何と言ふても、春は病氣のためか体が悩むなり。／○初夏の島や野球のリーグ戦

4月21日(火) ロマ書研究／午後には初雷雨がありて、空に大なる異変あり／○初雷や西の方より降りて来ぬ／最早や夏である、ウツカリして居る間に天地は動いている、即ち神の聖旨のまゝに！

4月22日(水) 読書／風邪の気味にて少し発熱を覚ゆ／小雨ぼつぽつとし、夜^{ママ}り入りて甚し／『大人教育』問題の座談会に出席、十時近くに散会／○いかめしき徴兵官に答へをり

4月23日(木) 読書／二十七日記／○大雪の中ゆく人や神の道／○いざゆかむ、よし倒るとも雪の道／○雪に死に雪に活きつぐ我身かな／○庭に積む雪一尺の深さ哉

4月24日(金) 佐伯理一郎博士御来島、御訪問下さる／夜に入りてより雨となる／風(東南)や、荒し／○雲^{ママ}も茶の撰待に憩ひ居り

4月25日(土) 朝日新聞社主催社会事業家の集会御一行の御慰問御来島を迎ふ／特に徳島の方にて御訪問下さる、『永く生きて下さい』、温情言外に溢るゝ涙を催したり、感謝々々／○よき人を迎へて晴るゝ卯月雨

週末余白 内に喘ぐ、むなしく、淋しく、日は過ぎて、我が足は、尚ホいえず、部屋は、騒々しく、且つ暑し、さるにても、神よ知り給はん、我が霊は、

如何にしてか、汝に忠ならむと、喘ぎ求むる、この祈りを！

4月26日(日) 集会にて教会論を話す／ラヂオ不通となる。今日は小年舎^{〔ママ〕}より貝をもらふ。／一寸と研究する事について話す。近々に約十日間研究したいと思ふ／〇一八は雨にゆれをり窓明り

4月27日(月) 読書／鈴木伝助師御来島にて、礼拝堂にて特志者のみに説教を頂く。／六年振りとして甚だなつかしく。／ロマ書一〇一一五について福音を聞せらる。／会館には谷さん慰問の芝居あり。／〇型りな■し重箱おしみハッタイ粉

4月28日(火) 原稿七枚、『神に任しませう』『わが魂よ』詩、大阪日曜世界社へ／神よ何卒この僕と原稿に御栄光を賜いて、あなたの御栄光に浴せしめ給へ・・・・・・・・。願くば多くの病者を救ひに導く器たらしめ給へ／〇蠅叩き叩き雨の日暮らしけり

4月29日(水) 祝遥拝式、聖集会／日曜社へ原稿送る事に準備、投函する。／田中先生より『文芸春秋』に大島記事掲載の通知あり／雨ふれど、ゆかいに暮れたり／〇遥拝の万歳ひゝく夏の海〔天長節〕〔下線部は印刷文字〕

4月30日(木) 読書／霊交誌も来る、出来栄よろし／神よ祝し用ひ給へ／神田兄の見舞に行く、思つたよりよろし／〇書にあきて又暮にあきて五月雨るゝ

5月1日(金) 原稿十枚、『道に帰れ』、修養団へ／朝は読書し、昼は野球を見る。夕方より起稿する／ラヂオを診察して貰ふ、引込線悪し／〇鍬洗ふ足に蛇来る小池哉

5月2日(土) 掃除の準備に半日ついやす／宗教思想が来る大いによし。近來の読みものなり。／書物二、三十冊図書へ出す／明日は掃除の予定なれと雨らしも／〇あかあかとしばし陽さしぬ梅雨のくれ

週末余白 神こそ！！、我れに何の、善きことあらむ、我が愚は、我れに充てり／主よ汝が、聖旨をばなせ、主よ汝が、救ひをばなせ／神こそ我が、力なれ希なれ、神こそ我が、凡てなれ生命なれ

5月3日(日) 集会司会を仰せつかる／正午より大掃除を為て呉るので山

へ逃げ行く／夕食後は荷物の整理をするので多忙なり／真黒になつて働く大掃除

5月4日(月) 原稿七枚、霊交編輯／一時より、評議員会／四時半より、室長会議／『天国の道』より原稿求めらるゝ、送るや祈る／○芍薬の蕾に朝の雨あかし。

5月5日(火) 原稿九枚、編輯終り／今日は、五月の、お節句よ、少年達に、招かれて、お昼の頃に、行きました／○沖の巖に松二本見ゆ遠泳ぎ／○納涼にベット離れて渚まで

5月6日(水) 原稿九枚、『唯一つの救ひ』、京都の『天国の道誌へ』／書物二冊届く／未だ見ぬ親を読む。何となく心なごやかに情純の潔まるを覚ゆ／○うらゝかやベット離れて海を見る

5月7日(木) 朝、俳句などなして過す／聖書を研究する。ロマ書十二〇なり／ツバサ発送の準備をする。／ツカしたる心地／○二、三人氷喰ひ居り購買所

5月8日(金) 原稿三枚、『栄光神にあれ』、高松母教会へ／写真アルバムを作り。読書する今日は花祭りとしてマンジュ貰ふ。／聖書研究、ロマ書十二〇／×高橋君訪問さる／○夏座敷軍艦に望遠鏡を取り出せる

5月9日(土) ロマ書研究／大分夏らしき陽気かして来たので、来週あたりより聖書研究したいと思ふが、誰が聞いて呉るか！、神が何を用ひて下さるか、聖旨のまゝに仰ぎつとむのみ／○ふとんより外へ出し居り蚤取り

週末余白

5月10日(日) 今日は母の日／SSにて母の思を語る。小年舎の二人の教師も臨席せられて居たり。／神よ彼の二人をも救ひ導き給へ／絵ハガキの選別しアルバムを作る／○療の灯は静かに更けて遠蛙

5月11日(月) 聖書研究初日なり、その成績は神に全任するのみ／ロマ書研究し、辞典を読む／○磯あさる火は点々と五月闇

5月12日(火) 研究第二回、御導き豊なり、感謝であつた。／『伸ひ行く者』の古稿を求めて見んと思ふ。／明日は神職会の御慰問があると言ふ／○看

護婦も御無心申す百合の花

5月13日(水) 春祭／神職会の慰問ありて春祭の行列となす。／大和舞として典佳なる神楽ありたり／浪花節の余興あり／○古典なる神楽もありて夏祭

5月14日(木) 聖書研究／高橋女医先生御~~ニニ~~と聞く、何卒早く御いやしを賜らん事を祈るや切・・・・・・・・・・。／役員患者の座談懇談会が行はれた／○炎天やすはだにつけし予防服

5月15日(金) 原稿七枚、俳句、短歌、藻汐草誌、『皆驚くことばかり』／今日は詠歌大会があつた。然し原稿書きにて行かず／○朝もやの早瀬をのぼる船の音

5月16日(土) 原稿三枚、『救ひの証言』／岡山より医大寄宿舍生より送本／北米より手紙が来る／聖書研究する。／○庵におちてつまみすてたり火取虫

週末余白 祈り／父なる神よ、あなたの、栄光の内に、起伏する、霊は如何に、幸福なる哉、その人こそは、信仰の勝利者、聖き器ならむ、父なる神よ、我が霊を、汝にゆだね、我がうえに、常に、聖旨をなし給へ、キリストによりて、アーメン

5月17日(日) SSを一人にて教ゆる／集會に語る／笠井氏に招待されて行く／原稿四枚記す。／夏らしくなつた。／○夏の月いま淡路島はなれたり

5月18日(月) 今日は新任の香川県警察部長殿(宮脇)が御来島として出迎に行きたりしてゐた／聖書詩八〇研究した。／原稿を書くつもりたが心^(ママ)が變つて止めた／○丸毛虫木下の橋子に這ふて居り

5月19日(火) 聖書研究／橘兄より研究書と藤井全集とを送らふかと言ふ。／そこで呉れと申送る、愛の故なら喜んで頂く。愛の故でなくば、断然に拒絶するべきなりだ。／○雨蛙境界線の杭のうえ

5月20日(水) 終日俳句／慰問浪花節ありしも行かず／夕方には疲れを覚ゆるなり

5月21日(木) 今日は、運動会／所長殿の樽ころがし等ありて、大はづみ

5月22日(金) 今日は、少し読書／原稿記さんとして果さず／舞踊の慰問

ありしも行かず／俳句十余つくりて暮／○入梅の島火葬の煙ひくふはふ

5月23日(土) 研究／葬式に出席／○蠅た来よ来よと友よぶ童かな

週末余白

5月24日(日) SS と、集会／酒によふなど言ふ、エペソ五〇十五一について、存分に『物に酔ふ』者の醜体を語る／橘兄より菓子とロマ書、ガラテヤ書、注解書を頂く！／○ねつかれぬ夜は蚤多く思ひけり

5月25日(月) 献堂式記念日とてエ師一行御来島。／ブラウン師、徳島より御来島、高島婦人と共に御訪問下さる／エリクソン師一ヶ年帰米とて送別会兼用、／○風鈴の窓見上ゲコグ船頭哉／清水兄急逝

5月26日(火) ロマ書の研究／清水亀太郎兄の葬式に感話する、『永久に立て』／午後六時より献堂一週年記念式の座談会を営む／塚田先生へ『詩書』を送る／○サクサクと砂ふむ^人音や夕涼

5月27日(水) 原稿十二枚、『瞑想と祈禱』／静かな雨の日を原稿書くと、心は一入に思ひ深まる／○水盤に種蒔きある日向かな

5月28日(木) 原稿四枚、『共同戦線』へ／昨日の原稿は鉄道青年へ／今日の原稿は福音丸新報へ／明日よりは『天か地か』記す心算する／聖書研究する

5月29日(金) 原稿四枚記したれど中止／会館へ慰問に行く、面白き説教ありたり／午後四時より聖書研究する。／○人灰を喰った話や涼み台

5月30日(土) 原稿七枚、『イブかマリヤか』／聖書研究する、ロマ八〇／今日は雨降りである。益々天候悪しき兆なり／○よいとこへ来たと飲湯を出されける

週末余白

5月31日(日) 朝集会／大久保^{ママ}候爵を歓迎して式に列す／岡山医大新楽記の慰問を聞きに行く／非常に疲労して終ふ。／○二、三匹蚊の出る夜とはなり
にけり

6月1日(月) 聖書研究／山本氏の葬儀に参列する／今日は峠氏にラヂオの引込線^{ママ}を修善して貰ふ／デンパの紐をなをす／○桐の根に砂あびて居る羽ぬ

け鳥

6月2日(火) 原稿七枚、『妻なるマリヤ』／聖書研究，最早や最後に当^(ママ)達する／夏みかん五ヶ下渡さる。／夕方より何だか日和が崩れて来た／○迎火や手を合したる母の影

6月3日(水) 原稿七枚、『母なるマリヤ』／雨の日を心を静かにペン執る事の楽しき働きよ，神よ感謝します。／聖書研究に更に前進いたしたい／○

6月4日(木) 聖書研究を今日で一先ず終りとす／岡山の田中先生よりもおハガキが下さる，ソレは病気見舞である，驚く／神よ，療養所役員の心を開き給へ／○片蔭に縄なふ爺や小商ひ

6月5日(金) 霊交編輯終る／ガラテヤ書をバ研究する，第二章なり／今日は砂広君にごちさそになる……。／待ちし野球は来らず，日和は快晴なり／○賭半場へ行く近道や草いさき

6月6日(土) 朝，エリクソン師の船を見送る，七時四十分／雑誌を室員，富士を読む／○堂うらの茨のなかや蠅のきぬ

週末余白

6月7日(日) 今日よりテイデン／SS，集会／本願寺派の弔追会あり／午後には万才の慰問ありて，盛会なりき／今日は衣更へをする／○先生の後よりつく日傘の子

6月8日(月) 此日浪華節の慰問あり／今日は少年小女達全部と千歳果樹園に遠足する。少年少女は喜々と走り廻り，我らは俳詩に更る。／老年はレコードを聞く。／弁当を彼方にて食す(ゼンザイ)／午後二時に帰る／○青■や波うちぎはのムシロ■と

6月9日(火) 今日は昨日の疲労を覚ゆ故に休息／兎に角，向上会に気乗うすなり。上下の和を計る事難し。／○福音の他は皆空しと知る。他は捨てんかな捨てんかな／○セ、ラギに茂り込みをり花茨

6月10日(水) 聖書研究／午後一時より修養団の向上会を行ふ／今日は『時』の記念日なり，事務所の方は差間違ありて出席せず／○巖はだに咲き残りたるつゝじ哉

6月11日(木) 聖書に親しむ／久し振りに散髪に行く、上本君にヤツテ貰ふ、大感謝、コレデ三、四十日は安心である。／好天気にてのぼせ気味なり、眼かすむ也／○ソッと摘む我が指さきよ花莢

6月12日(金) 聖書研究／ガラテヤ書と現代と言ふ題目に大いに考えさゝるゝ処あり／感話、人間苦と人間生活と言ふものを記す(短縮)／○雨の療おもひおもひの昼ね哉

6月13日(土) 聖書研究／午後四時より評議員会に出席／何となく足傷が痛むのを覚ゆる事である／馬鈴薯を三宅さんに頂く／○

週末余白

6月14日(日) SSの子供週間／集会にてガラテヤ書と現代を語る、不十分ながら――／塩野さんの拾得を受けて行く。／○

6月15日(月) 聖書研究／『原稿七枚』、藻汐草／研究、俳句／研究、短歌／役員と患者との野球試合を見に行く／六対四にて患者の勝利なり／○庵治浦に水泳場の支度かな

6月16日(火) 聖書研究／宮内師一行を迎へ、大塚氏と種々に語る。／集会に於て感想を二十分間位い語る。／夕には七味兄の記念祈会に出席する／○梅雨に入りて天気予報の旗白き

6月17日(水) 手紙を四通記し。／野球を見る、十六対二にて患者軍の勝利となる／事務係長を迎ふる請願書の建議書をバ清記する。／○ランナーは迂り込みたり土埃り

6月18日(木) 聖書研究

6月19日(金) 今日は日蝕とて朝より準備して観測せんとする。／午後二時より丘上に行きて四時二十分迄観測。月にはガス甚すくなく、大氣中に浮遊する波ありと思ふ。／○日蝕に望遠鏡出しあり夏の療

6月20日(土) 今日は終日種々な事に捕れる／大浜先生と語る。／感じ。／人間は自他ともに依頼するべき様のものでない。／只、神のみ依存すべきである／○梅雨あきて部屋の畳を拭にけり

週末余白

6月21日(日) SS, 集会／バラクの立てる分岐点について, 別して, エジプトより出でし民衆の信仰(昔避)と紅海を渡りし時の(純信)とを語る。
／○肅々と押し寄せて来たり大夕立

6月22日(月) 聖書辞典研究／野球慰問に見物に行く, 打撃戦にて甚だ面白かりしが, 久し振りにて夕立催いとなり, 二対二にて休戦したり／○てつぷりと肥えし男や清涼着

6月23日(火) 聖書辞典研究／米沢さんより田中先生来島の節の話をセよと相談さる。――／所の事は断念したり。只, 田中先生と個人的に心動くものあり／○川土堤に田守とあひぬ夏の朝

6月24日(水) 田中先生よりの手紙を持ちて, 惣代さんが二十八日の感和の件を話に来られる／兎に角く, 田中先生及び我ら病友の為に善処する旨答ふる。／思ひ切つて話すべきか。／○鉄橋の上下白ふ月見草

6月25日(木) 昨夜は映画の夕にて, やゝ疲労気味である。／青年会弁論会に出席, 『雑感二, 三』を演じて来た。／神戸の芳賀吉蔵師を迎えて語る。

6月26日(金) 今日は芳賀師中心に集会して司会をする／二, 三兄の証詞ありて共に教へらるゝ処あり／○空梅雨やラジオが知らず水争議／○

6月27日(土) 今日は休息して終日何もせずに過したり。／神より御用なき時は, 静かに活きるをよしとす。／自己意志の活躍は間違ひ多しと知るべし。
／明日は田中先生御来島下さる。／神よ我れを用ひ給へ

週末余白 ○潮にうく星影すゞし磯を行く／○入江さす星影すゞし渚ゆく／
○入江さす星光すゞし渚ゆく

6月28日(日) SS校, 集会／田中先生と岡山芸妓一行の御慰問を頂く。
／歓迎の辞をば述べる。先生に面会して語る。／○この夜修養団員来島を九時迄待

6月29日(月) 今日, 大浜先生より書物を拝借する, 五冊なり／喜劇の慰問ありて見物に行く／他に何もせず／今日より聖書研究を開始の筈なれども, 一日延期する。

6月30日(火) 聖書研究, マタイ伝六〇五以下について／祈りの心の存在

について。祈り研究の予備講なり／明日より本講に入る筈なり／○

(つづく)